

文
3154
6

所んほ トガ
市川 福富町
兼次郎
三丁目

月霄鄙物語 てく 五卷



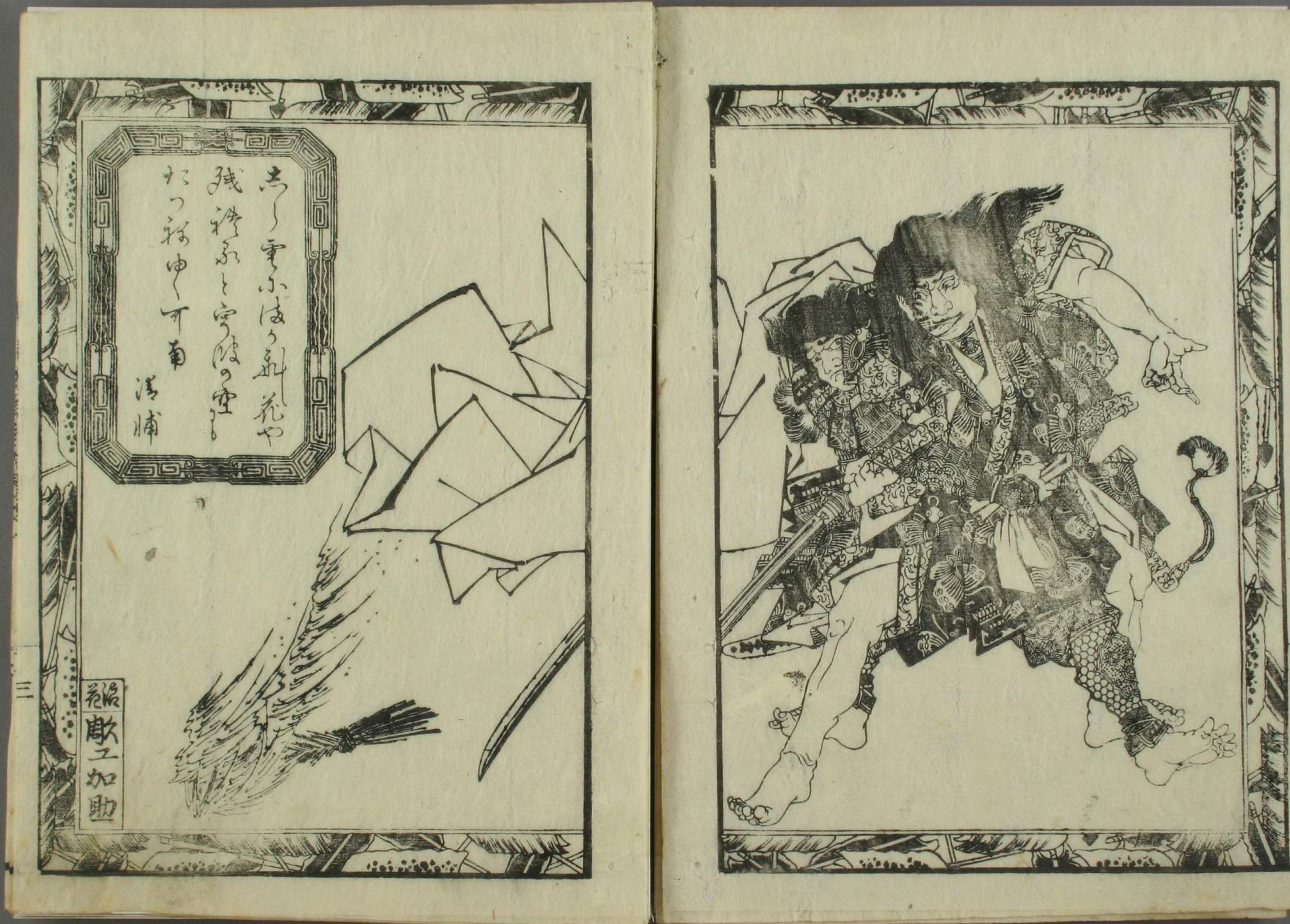
月霄鄙物語 てく 五卷

今朝見ゆかまよ 滝川たきがわかし
うらへうらへる御手取ごてとりたすへ
吾妻あづまきみうど
のね

杖代擲玉一わす景は更漏の音とて
桂木枝の露をもれ言の葉片露がる葉
がるみく枝を吾ら歌くうそとゆは
至しまや娘捨山ふてあほのえき
娘歌をねうきやひきるこちち野
らむていと車をか那參わざしてさく

かくふ三あたのぬ一浪速の旅子は
かづれみ先代はく祭神へとも素よ
いつく浦ゆかまほ君をすうと歸久
まで此日成免づる御身もかりの
浪速ある處不之間坐





信濃國埴科郡菌原莊伏屋長者子太郎



岡作子外吉

月宵物語後説卷第一

鶴の三田の短冊

江戸

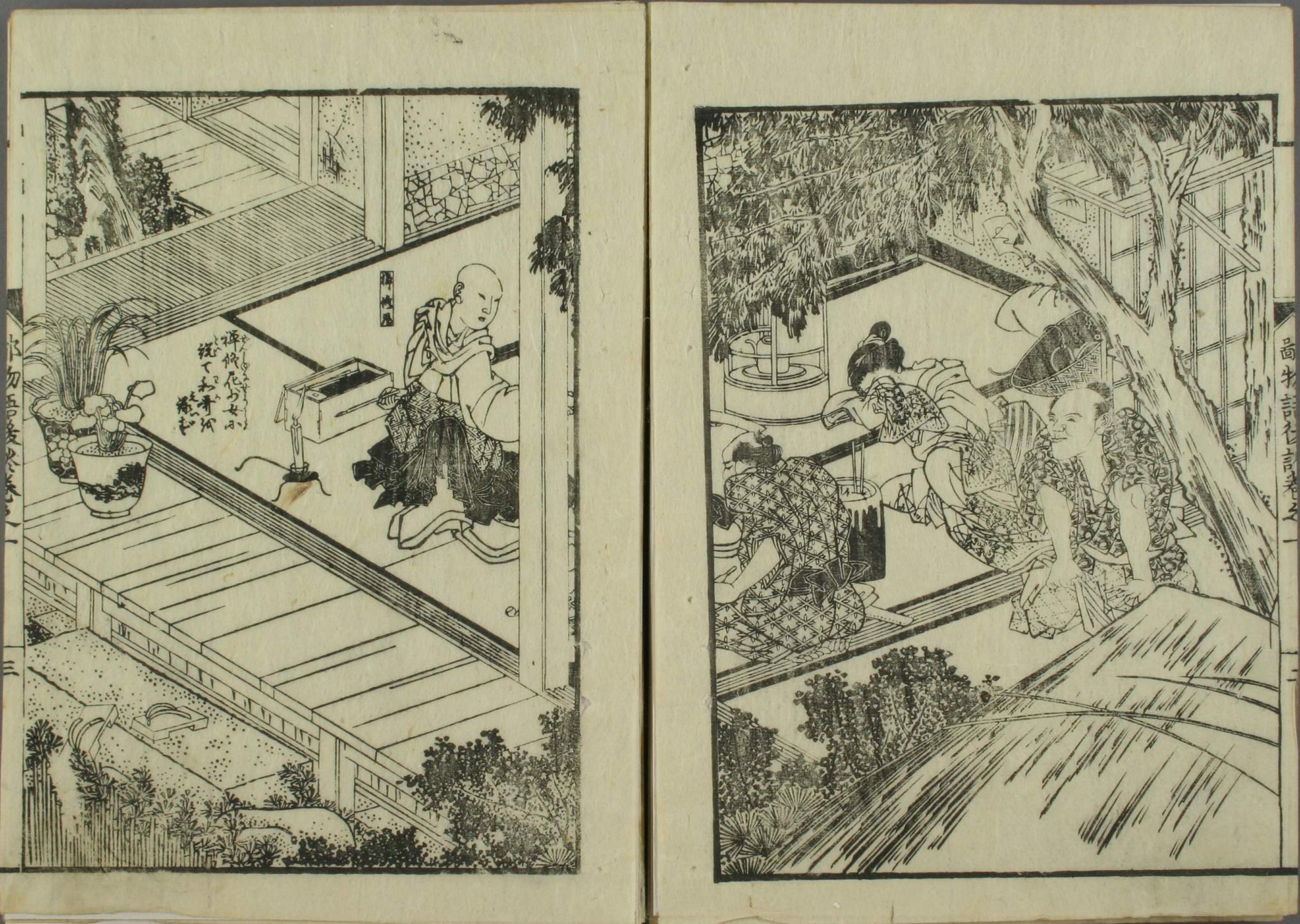
桃華園

著

楓も甚しう波茅が扇の侘寐勝より琴をひひて莉色青葛が扇の袖草庵
扇紙織て屏風を造り秋を恨みの因に歎と看破見殺の白眼ゆめ軒の紅葉
を勧めとく毎念夢想と年少も強じ時雨の心膏りあへてすむ建久四年せふ
富士の掃蕩の御陣小於く曾我の太郎被滅舍弟五郎時致寢入河津の前
社安が仇讐一鴉絆縫を付す貧弱狼藉よぬび一早禍念微の上ゆづれ
いも春とひ露とひ世ふれりや思ひれんに改を以て時致を御許儀の上助令
たてかづぐの所沙汰も豈有つれども祐絆ぐに又一妄念所挾く家財を散す
時致が命を大切に捨てたのは推て頗ひ今ぞ哀れ御安ふるを禁へ後日
宿意の經ゆづあくづれを遙ま時致も切をふらうぞ口惜きを失ふ其の如れ

あはれの事ある美女數多有て縁会園の撫治郎を似て花着の同流と
てそせと中も曾我兄弟小副深く深く撫てる姉妹二人有経が御深る
を虎御前とひて大破の墨小ちの時致が副深るかに將とひて化粧坂
みからみかづるが曾我殿の故行墨ともお歌きふ況く有病將妻のせり有
換を飛花落葉の間の茶ふに生死輪廻の去來の経とも雷光石火の新れ
けふ感じて熟思ひ見るふきうとて御世の末絶りとかけて頬めにま壁に先立
きつるをかの身の木推みうんをして何近叶の何近う味きうにわ残うた
てやへ山川過みほとて寄し家よ代償いねしてにも集うかうる黒髪の惜ゆ
きかきぐ捨て建久も早七つの年の前の木の晩の日とひよ法神
虎御前へ背綱修比丘尼と改め少時へ捨華禪荷比丘尼と改め極樂院の純
頭禪師と云尊號はひびて戒をうけむく御箱根の裏うる若狭のとさ

あはれの事ある美女數多有て縁会園の撫治郎を似て花着の同流と
せらる庵室所結び念佛の三昧ゆく兄弟の追福との三念は吊りひすこを
殊勝うれ柳は縄あらの奇遇とりて幸ひ無く玉觀は素の理づか違て廣く
四教圓融の宣霊喚くらぬるの切極ふとそ不取而覺の數よヒト不羨のえあ
ぎ只一念改軌の信一念被まふとて往生成仮の園ともうると說たまひくわむ
けんの未來の種類りかつて半共うりかてあ人共不見ふ有年ニ歳
余りはてお將へ西法二年の秋の始め山間のんびと名る圓す相の筆と
教失ぬ虎が歌き大かとすげ先實の妹を失ひつ思ひ鬼ふの角ふと
空めよきいは世の中のあひひうれしも有きふあひほがと御室の後う局
山ふを移をかして跡跡もと跡よ吊りひらるく山中を表する虎御前へ相模の國
草井とひの町す代所守農父の娘うるうるが先祖不思の事小依て没落
す及び園金井の莊とひまふうて冬のばりうて家が甚く廃く朝暮の



煙ふゑぢうれ考案の物語を大藏の席は況やうか將へ帷幕づけ事
所の使者の娘より二人よりふ兄弟の勢消むと悲せきかふとてか奇跡も書
じて今朝の邊小野へ並ぶかくとゆくにゆを縛るを後食中の太田翁を慕る者
のあらわしきされ龜山の院の文永の比ひをも虎徳ひ時うびそわくの
因徳變形せしもの身と風流を遺と傳ふるとあんずれ光陰へ續りども皆
ゆきとすよびて今美え夕もとや二歳と暮れ生が深徳比丘尼の實業殿る事
十三年の忌具六禪智亮の七年ふ當をば追善供養より緋衣の喚唱はえ
び七君の功德へ被善の圓圓不執行せば彼主事が勸業の例もあんべ信頃うる
善光寺の寺號をびて佛の前より奉とおもく本願のよをあへ
して本相山を中く里柄の内にわから様が寄せと續かるもひづる事
元在の三田とりの宿は多くの歓詠を刻二室を經へ佛る圓

宿すてと席をうきる宿するりと其夜ハ十四日の事ゆく日月の成る
しも雪をばらみせば空の意色あめかへて旅の意のやすさすとわを身によひ
波を流す夕様先よ出づ神宮引とまどをひづるがく一例紙滿るる事
を乞ふ
其の音にてうとまくらは者有りや荷取る事常と宿の事まことに
親の宿すて人客の料は候今と様持とりみ里山川代事へ女の今宵忙ひの爲
ひあひて宿の主が拂ひて是よが晴むるに御櫻花は風落葉て帶ふ
ひ船を流すやまくちふれせん同ド軍の事るゆきが身のよゑへ
御の上と事すにまくと船の經の大國の事は數回抱の事も難らせ
うさりけ二世と號ひまふがれ事みてようせぬ味をう、思ひて育
みたる身せめてへ省も生じて有ひる味を以も先立つれ是彼食く
は能候事の御事ふ供事に身をあまねば、身うちの處りの纏事ありよ半
と元

景小安れう嘗ば候多き事を經れ候て、其を漏すふ學、織あら失る
全生も経り候るが、此の空氣を察する人倫覺の行とくに考へて、未だ之
を半生を修行候づる根柢下て、是想より堅忍の事行儀修法の根柢と
能あら覺の程りより、其の為實の心つと歴然て始也。觀く少く事、未せ
中はよほまに人を教化するにて、その如くして、其の如くして、標示し、遍ひつ
それが教する紙片すなまく、世人の勤勉を參り解りかぬ處あくまでも、は
而後其紙片を修る程りて、今も空氣の行ひと、彼を半生を度せ
生て、死に處へうる前世の所感されが如業のうむむむむむむむ
べき半生あらうありよも、寧ろ如く、半生を度せ、其の如くして、標示し、遍
るもたる家をも生ひ、身紙も落て、其其業因縁の世よ々滅ぼじて、と
たやうか川竹の流の事か身紙もる者もまづ、まづ、嘯き氣に半生の

數を重ねて、一にて身半生を度すをあらうが、あらんが、彼一筋を述
べよとて、已えざして、實在等是紙片は、傷つて、も、遣一者とて、亦
物量紙片を、往くる事無く、けむる、虚言ある、長舌のかどまでも
思病せ、暫不、辟の族、すともうぬけ候、嘗て、警え候の、其情狀太かく、ま
思ひ難き助くる業、あれも、損ぬ、髮かは、午を、破り、神陵を、汚すの、荒隣、神
佛、ハ、ゆく、殊の事、一も、と紙片を、て、か、譽め、廢、舊紙片を、ひがみ、共、豆、ま、く、皆
御、半途、悔思き、まづ、せて、忠孝二公勅の、勤めを、を、勤めざるよ、これ、何、あう、の
立、立、う、ぎ、唯、み、すも、う、ぎ、病の、根迹を、す、迹、立、う、ぎ、立、う、ぎ、の、一つ、すと
切つたまじひとと、先づの、言の、當、小女、改め、にて、仙父、うる者、こ、ナ、て、へ、宿の
か、今、雪、そ、不、恩、優、有、猶、き、道、限、を、宿、ま、せ、我、等、ハ、や、も、文、ふ
て、折、そ、り、者、も、す、ん、得、ひ、じて、有、猶、に、道、限、を、宿、ま、せ、我、等、ハ、や、も、文、ふ

よせく涙をもたらすはれの御移化へおでて涙の氣より喪服をも出一用
意の犠牲一首残さずめかみかづの名残留惜又遠記念つやがみこ

なげたる山路の麻の衣と同じ衣と表てこつるあらう

比丘尼禪修と書て寫すアそれより禪修庵へ住む所よかくて碓氷山麓
と號す長倉の靈かくも今の碓氷峠へ中島の駿河口して其の邊へまづれ
山道す追分の宿す出石と往昔蟹場の源流と謂きてなもん山の圓里三十
丁わざぐ向流にそびりばと難歩ひて切り合ひ行程と怪井の宿す次第
掛の狭やハ追分の間を破城りて渡すあすう渡ろびぬけらふちとそびえ
てを近人のよみとがぬと傳る。烟草小手ふねひるひよひ級引みつ
きだる金剛の牧秦向のてもまほまよどまふうけててひの葉うもと
青空に拂はれて點空ふ連るよ御し史場がかつらうの風情ともス

霞の松の林をもひて朝るよき山のつぶれをかじ潤の前途をもぢ
冬の孤村の腰を懸をもすの緒のよと暮るよ城をも餘る邊の宿
莫もぢるひの里の宿は處せだとうる

小袖醜の跣石

それ相應うる小佐鳴の國とふ幸の那葉原の仕作屋の長者園うふ
ゆきうる相ひてさうはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
よち能へさうはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
の葬送よかくひひ丈の足を棄まくる猫投の大怪を付しよもとみ怪
歎よむむよくへくらうの世間追と快方よも及べやうの死傷の寢墓
村の要従者ちとりよもやつらへ又の歌よま歌よもよまく箇金罰
の革履とう半のけぢをほくらふわうて已れ日よ替ぞを被ふ是がと
思ひうる毎会のとほし骨髓よとすばらしがすふ運上一血氣ミテ

のやて底口をどくととろび波がれ、要血皮膜の傍ふくらみをもてほる
あまむらおとお彼歎毒の爲よ附き、見ゆた面がりより瘡瘍とへ
る病の日を経て極は路也院も杏園も退をひて既よ方すじ城もけうれ歎
あゆみの里か月ハ只非見放遠の筋のほて歎ともすみくさむあすそ
くとて、ゆくや、ぎくとて、ゆくや、ぎくとて、ゆくや、ぎくとて、ゆくや、
察候する時景の牛乳、よき易よわきも興る程のけんうる性管も
生が毒の小便も今ハ皆くいふもせんをすく鬼山せん角やあほし
生をす、外御ふと見ゆあつて、まつて、まつて、まつて、まつて、
うううううううううううううううううううううううううううううう
所は靈験あらむする地巻きのまくはさんだふまつと思ひひてあ
まがくうるえへ連する人の力で治療まで巻きまわらぬべ候等の
脚驚の諸病、小まがう身金紙擲錫ねりと、効じあらう人の見ゆ同
うをゆぐる胸よせむる浸血少つくべうるなみあげする今むよが
毎児の親をすよがゆく小まよを流て、袂をくみとげてハロ紙とぞ拂は
御里小額をはあては肺けのとて丹誠信をうし御の小ぞ失をくほの
冥物、うそう空へたまを候へ、信紙を候の衆生可むか聲より、
意願來してまを思ひ今方の誠天も感じ地も應じて、かく本縁も復て
勤じてありひなまくとて、金はのうあり教り、それを三七廿日と
之取事小もあて不思儀の靈薦、嘗てうかがひて、度空端處の心臓の裂け

りの紙断をうへて立廟へまの金紙折ひ紙をせうと、かの御堂より下
じやうへをせむる後悔化妙難大望地巻き仰き致くの大慈大悲の辭を
垂たまひ妻が一念小悟てまが絶痛を全快きにめがくと涙を揮々
披陳の微體、小まがう身金紙擲錫ねりと、効じあらう人の見ゆ同
うをゆぐる胸よせむる浸血少つくべうるなみあげする今むよが
毎児の親をすよがゆく小まよを流て、袂をくみとげてハロ紙とぞ拂は
御里小額をはあては肺けのとて丹誠信をうし御の小ぞ失をくほの
冥物、うそう空へたまを候へ、信紙を候の衆生可むか聲より、
意願來してまを思ひ今方の誠天も感じ地も應じて、かく本縁も復て
勤じてありひなまくとて、金はのうあり教り、それを三七廿日と
之取事小もあて不思儀の靈薦、嘗てうかがひて、度空端處の心臓の裂け



寢と是猿せしは往度ちの白蓮花の上まよひぬかう極やる光明を放
て小仙が極のふ草てのゆゑく善かを探の清輝爾今まの爲小角の身
を捨て渠う疾痛を般人を希へて余金残りて佛心よりて即ち仰ん爾が
信の機を感應あつて一つ奇特を示せり汝若干の後岐をあつて遠小淺
間の縣學後より董ふ深くあんの汚を洗ひ菩薩の虧す事會せばまの
病一年を待てて金下とまきく告乃と是と忽ち善童終まり
小仙があつて孤見ほじと且の聲に具が既び天を仰げばよ依てすかと因に
念へたりて庵子の有くと實相を發ひて至想の報告あり平
いとまが経病平金あるの報告り刻も半く浅る小口け入洞が済む
れば清ら大菩薩す於会と重くせ大經成就せりとまより山小跡をこ
里を家の業をも助ひて取ひひを惡力自へ例の食客人をれに憲せ

内もあたまがまか半あぐれ告がとももとさうがざめ紙とのがれよ
てそゆえつまび獨りり色うとふ支支まうち解よへ包みかじて曰く
蛇へ滅洞す孝り蹴壺すうてゆれ清き滅洞大菩薩よ行誓城を免
地花すよへ秋かひく五ひせふはきまくしおづの形を捨てて奈北
せぬ處つゝせと無れ、ふ原りうるうもぞれり給ひれりことと
里人等も小仙が女めの標形業て滅洞が歎のが詠と其善戒世よはく
蔓の高望義施

されを遣きのんすりてあくあ耳のんすりては理車のんは精く
はせあよすげば一切の業をふかん御るをとどかせ況や夙未が御くを
や世ふくもすみん考中ふもかてせんに零かと遠ひ立障立壁とて不満
きゆせくすれをあら減りく様もくうとくらちとくらぢとくらぢとくらぢ

守りおれまに邊からぬる事ハ何するもあらず、ありゆる食餼と儀
にて神をさぬみん宿すばは寝て酒をすまを助け人を縛るに極め
を女も烈婦もアサヒを能うる孝子の如ひに善無き教訓もさ
つゝ女を操ひ邪見の如すわざく傳ぐをよりて皆も亦口説む述
べるが故也。雖くへつて改て養むるよなげ婆娘あのを
呪詛小く随ひしも少く及ばず半より小仙が女女の柔れ
きる。又氣れ悪辱ほく烈婦がうよへ引咎して是方自の名ぞ永恩教送
あは生實不前世の業因とへべうつむきとより善財の因縁小生
うち教化る紅葉小野童は其修學の事もむとくうち教ふふとの
魔界へくわくにゆきあく段々がんざる小魔ひて類貴ある
眼。一ちるい藍色の雲をそばに拂ふ光りて鳥獣の因縁を聞く

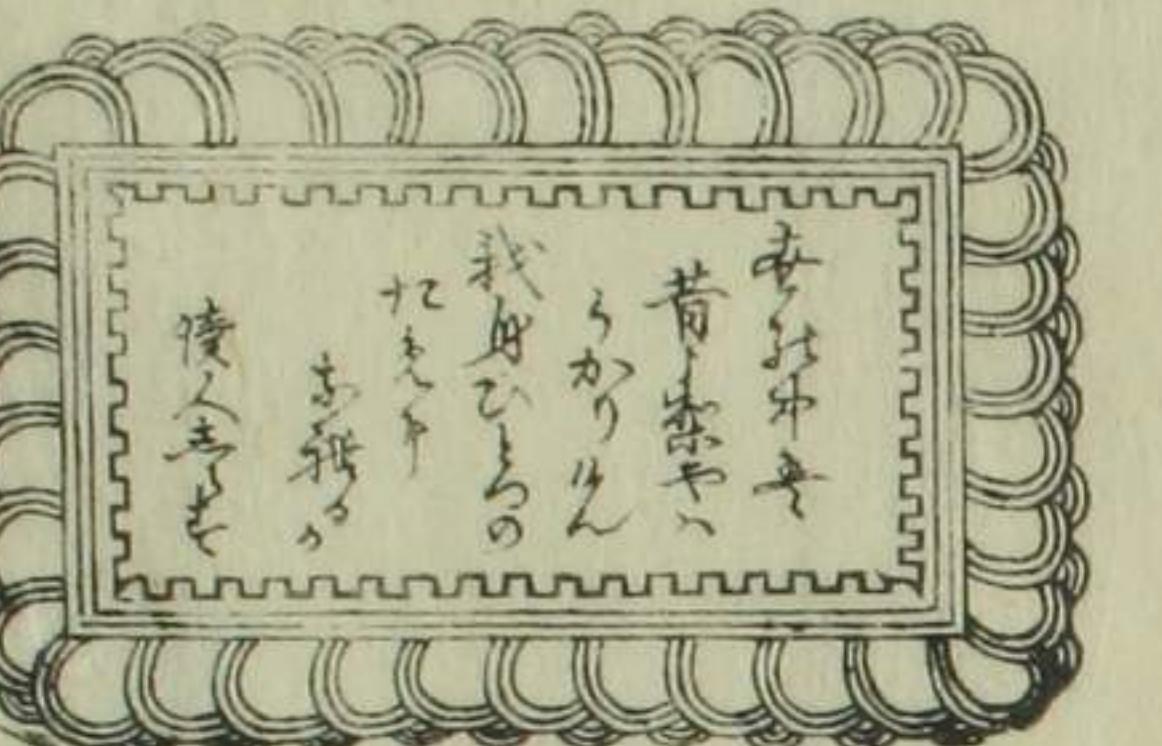
見あづく歯はくぬけて頬はくばく顔色もふくまの面の如く鼻
の角は彼はうみよゑくふ口は耳の根すくどもあけむが如く教く教く入
来る者皆て惡力因縫見るとひは鬼とほ思ふてもうを立をわる
ア鬼婆とも惡力因縫と鬼力因縫あくと名前付へれおき取けるが
遊とひは鬼の鬼ふくらむとひを淫を止むる事とひあくとてかくら
中どもうつこひの奇怪する事あつてひおもてがひをねびじて重よれをうげ
氣つちよくとひがねくあくとてよひがひをねびじて重よれをうげ
あくとひをうとてあくとてあくとておもてがひをねびじて重よれをうげ
小仙をちくわ陽ひうきてとひを更よ言ひと重よれをうげ
小仙は隠る。小に向ひておもてがひをねびじて重よれをうげ
たゞやとおもてがひをねびじておもてがひをねびじて重よれをうげ

昌黎先生詩集卷之二
馬
馬はりて廻や御とてよどうの廻ふうけと金のえよりて湯の
まがでて元の廻入情へとむかし小娘が疊衣を拂ひゆすれどいふと
まくと女を引張して廻さうがまもふゑふえをもすとすいと
いうる而少色中ふむつすとひづくとひ是よ被とひもれどもゐる
角ふわさざれだ戸口裏ふじよじよ表からび御をばして
たぶらほき有つまむ宣表出西風うゞあどんのまをあるま
耳す今や里方自ハ宿ろより犯せどきづれまみて已事秋かく
何事ぬうそみれあくぞさがさ耳ふくく神もせずれどもう半よ
何事やと尋ねまばきのまくひまくとくと黒方自ハ不立拔一家
も轍ぐばうのまくひげてふくにせ日月よりん得ぬ半ドリ有りれ
ちうのまくひ一重つままの前を志のび残眼をもぬきて夜半お拔

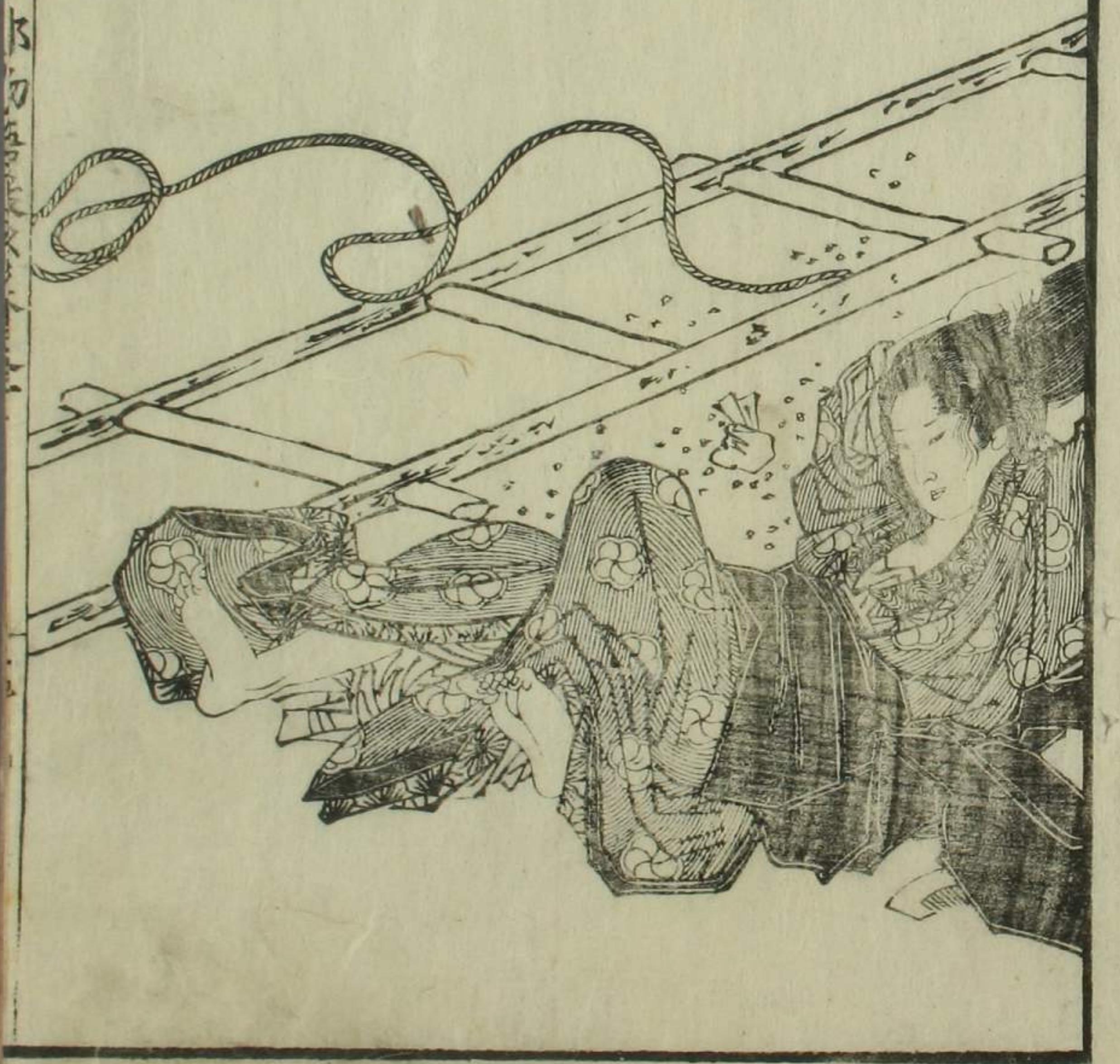
馬
馬はりてかに男うらへ西とひがのとへひづるまう太袖牛馬事わ
とじ奴うらへとまががまで男と紫ふはまをひてさんと歯ぐをも
き出夜城をまく眼のまみのうとみ所用をくるへ馬色えどまゆふ
あくまう有換きり極く城壁の方を引紀御劍とまの縞小座色
との紺馬座物をひるを破りしもとく事ひ索れも更まう
とあくがれを索りらぐみく種くねくと御鏡とあらまもと拂ふをひ
と音くてもあくまとじく小仙御のまくすて二石と拂ふをひ
船を今宵ぬごの夜されを臺へ渡向の瀧ふうれふはあすいかくを
ま喰うむよけと喰うてか花をひく御前お傳多くせらる御鏡と
まくと腰はてまきが御さどむと見それなかく進みなど興ひづけと
何をす主催りと門のぐう押さぬもば跡く難と難と御見合せを

量りう事と翠うたう玉房自はまうと見すよりゆるの御まよとばうの太鼓
あげくまれ死はすら時まの生眼根へ何故のえへゑびねるがうのまふ
風ふうとひきぬかぬからてだまき引まき座ゆぬを豆みて四つ鳥居
立じてりどり紙をとむかたづけ頭の掻め跡けよと搔ますて左座
打ハ撒もぢうがひの櫛をあめぞ起らうなうか仙人庭ふみよびに具ひを
金くわに散り西をりども又吹入をさうかな打打拂りえふを
もれて用ひがまえく身をふ安くつだあまゆ中がらよしる出ゆく
きて呼吸せきてうづ伏くる有様ふみの見ゆ因ゆ氣をうへてはまき
ぐて是方自が袂かをがつ脳をすゞゑもくへ寝ぬせども中へもる
がものゆきさゆと見元げしがく座すあつ合馬の馬繩を医世
びく紫ふ小仙をいすあは死よすの者紙ちうふくう甘て織

赤裸よきる股の根紙ちうふうてとむかてサ金晴く思ひて有のまくと
さうたまよあくへ恩の根を止むれんといひうすく小仙の恩紙つどりで
つまづ金うちう半考うる惜をまくまふあくやとやまと紀半う
かくかくうとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
せの身じくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
姿をあくするあくまの病の重うなうとくの致うるま根紙の根紙
ふき紙ある半あうとりを黒が自眼紙じき生てまくあくげせふに
絆の重ふるのほ己に走とくもかくろ空車紙とくあがそれゆる
あくしてる絆をあくやと黒が自眼紙じき生てまくあく根紙の初
秋よ秋の根紙で而佛の頬絆の根紙をまう一す、座すとくとくとく
まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく



おはゆ
荀^{くわ}や
うかり
我身^{わがみ}の
たまへ
あがむ
陵人^{りょうじん}



歌りしうどくを軍方自へかゝりと行參すひ表人の庵よりつら算ひて
を教て有りてとく教る筆紙室ゆきをさびだらうと紅室の先に行
をさもがゆきとて痛みぬもとすら拂のあくまに到り痛み出で、堪
能れど誰ぞありて呈候すれよせ拂よと極まつまんじもその痛
次第小強くきて身の熱氣殺りりと若もと大方きび眼すすむね
も眼ももれて軍方自へ室の痛み肩のあくまでが終ひれりとや
ま圓城うちもたる空孤つうみて若しや助けよとりふみを減よ医者とさ
うけども甚うひ更ふさかうとて不思儀するから強きの中もんばうちの
へんのゆきと寧まゆかしきと小修守ら以解せスの庵を教とぞま
たる本統一粒の殻を捨てて清き水と洗ひ佛前おぼく妙の承見
を持佛の前小便は渠をも御事成たゞく御佛の御ふもすと

懺悔シテまごも軍方自ヒトトが苦猶カクヨウハ時トキ利トキふすう縛タツ言ハシマ立タケルてあるとハシマゆ
る事ハシマりよ已ハシマが如シテ今追アリの要事ヨウジはつまむ半ハーフ半ハーフと真マサニふわうとゆええ縛タツ
半ハーフ半ハーフと真マサニふわうとて甚シテのじのそれと呼ハシマわう半ハーフ半ハーフと縛タツの
病アツヒもあくまるとされゆハシマもあくまうかてまよ能ハシマがん死マタタキの經思キシムひせられて
まよにまよもん紗布シマブする者ハシマておれ者ハシマを御降マタタキて被ハシマひきをとひての
緒ハシマ結ハシマ山ハシマや小及ハシマと成ハシマハ被ハシマ篠ハシマもとすみ等ハシマの布ハシマ籠ハシマを牛ヒツジと
会ハシマ移ハシマ殖ハシマ和ハシマもとすハシマ山ハシマ亦ハシマ仙ハシマもよすの野籠ハシマ牛ヒツジの身ハシマの縄ハシマくみ取ハシマれま
遠ハシマ歸ハシマとゆく是ハシマが遂ハシマてお抱ハシマきをゆるお我ハシマはとお夢ハシマも廢ハシマして軍方自ヒトト
毒アツヒもとゆり立ハシマとおもいはとよう起ハシマしわざひう怨ハシマ鬼ハシマせん角ハシマや魚
いわづハシマの因ハシマよは癪ハシマの前ハシマままでしゆ供ハシマお祓ハシマ清ハシマ身ハシマをう聞
とがちハシマてめやあらうざう半ハーフが我ハシマすとお財ハシマの難ハシマ助ハシマけびたま

皆の爲かばを以ひて是方自が若くは猶御き難すわうらるの程
が者過にそれを是方自の志か曰くは因の爲し人見先身小敷ひ
きくして小仙狐さむもふぬりてかあきらをる詫せ一牛金御仙
の御宿さんと産ふて死びてそよおもあり亦へ思へもあきこ鬼婆
のよれ草半こそ生あんばつひ小早く死失よがあとひもあく者も
直て鬼ふち角少も悪業の轍ひ云々の業園所進ふとども海廻の流歌
をまびげてまのあくふ轍ひをまねく半自らまむるわざといふ
ねく事うふるねとくそうからむけい鬼婆がゆの縁をもる半次
の縁をももくと夜霧迷る底うきるの所縁をさうしたまく

月霄鄙物語後説卷第一終

